

# 専修大学図書館蔵「菊亭文庫蔵書目録」 解題ならびに翻刻（一）

田 中 幸 江

## 一

藤原北家閑院流、西園寺実兼の男兼季を祖とし、琵琶を家業とする今出川（菊亭）家の蔵書は、現在「菊亭文庫」として京都大学附属図書館、専修大学図書館に架蔵されている。菊亭家は琵琶を「家業」とした楽家であると同時に、朝儀において重要な位置を占めた清華家の一つでもあり、日本音楽史研究、歴史学研究において、その蔵書の様相を明らかにすることは重要な意味を持つ。<sup>（注1）</sup>

京都大学附属図書館架蔵の「菊亭文庫」は、同図書館のホームページによると、大正十年（一九二二）十一月に今出川公長氏より図書八七二部一三三六冊、同十二年（一九二三）十二月に図書三八部四三冊・文書八二二部が永久寄託され、さらに昭和二十七年（一九五二）、「国書類聚国史外二十九部」を同家より購入したものから成るといい、蔵書の内容は「菊亭家家記、特に家業の音楽書を主軸として有職故実に関する文書記録をもって構成されている」という。専修大学図書館架蔵のものは、平成七年（一九九五）に刊行された『専修大学図書館蔵菊亭文庫目録』<sup>（注2）</sup>によると、昭和四十五年（一九七〇）に同図書館の所蔵に帰したものであり、「和歌に関する写本、詠草、雅楽に関する資

料、宮廷の儀式関係、日記類を中心とする諸記録<sup>(注3)</sup>など文書・典籍合わせて三、四四八点から成るといふ。

論者は現在に至るまで、専修大学図書館蔵「菊亭文庫」中の『御室相承事』(整理番号一一五七)、『諸社縁起発端』(『諸社功能』。整理番号一八七八)などの個別研究を進めてきたが、いずれの書物についても菊亭文庫に蔵された時期やその経緯については全く不明であり、菊亭文庫の歴史やその実像が明らかとなっていない現状では、書物の個別研究にも自ずと限界があることを実感した。

そこで注目したのは、専修大学図書館蔵「菊亭文庫」の中の未紹介の二種の『蔵書目録』(整理番号一一一・一一三)である。この資料にはいずれも奥書がないため成立時期は詳らかではないが、記載されている書物や年紀から江戸時代中期から後期までの間に作成されたものと推定できる。一つは文書・典籍合わせてのべ九一点、いま一つはのべ六六五点が記載されており、現在京都大学附属図書館や専修大学図書館架蔵の菊亭文庫中の書物と一致する書名が数多く見出せる。<sup>(注4)</sup>つまり、この二種の目録は現在の菊亭文庫に直接つながる、江戸時代中期以降のある時点における菊亭家の蔵書の様相を示すものと言える。この二種の資料の他に菊亭文庫の蔵書目録の存在は知られず、極めて貴重なものである。また、現在の菊亭文庫には見られない書物の記載もあるなど、文庫の書物の出入を探る上でも重要な情報源となる。この江戸期の菊亭家の蔵書目録によって菊亭文庫の書物の伝来の様相が浮かび上がるとともに、当時の菊亭家の蔵書の復原、他の文庫との関わりなど、数多くの謎が解き明かされる可能性が高い。本稿では、この二種の蔵書目録の概要を述べ、紹介を行うこととする。

まず二種の蔵書目録の書誌事項を示す（「整理番号一一一三」のものについては拙稿で既に書誌事項を紹介したところがあるが改めて示す）。

①『蔵書目録』（整理番号一一一三（第八函〇二二））【<sup>注5</sup>図版①参照】。外題・内題共になし。横本、縦十二・三厘、横十七・二厘。袋綴。写本。墨付四十六丁。奥書等なし。表紙見返しに『和漢朗詠集』の漢詩が三つ記されており、その漢詩の漢字一字ずつを書物の分類記号として用いている。漢詩は以下の通り。

嘉辰令月飲無極 萬歲千秋樂未央（卷下「祝」・謝偃）

池凍東頭風度解 窓梅北面雪封寒（卷上「春」立春・藤原篤茂）

花下忘帰因美景 樽前勸醉是春風（卷上「春」春興・白居易）

見返しに記されるのは「前」までで、目録として現存するのは、「嘉」の部から「帰」の部まで（傍線部）となる。収載数は、文書・典籍合わせてのべ九二一点である。

②『蔵書目録』（整理番号一一一一（第八函〇一九））【<sup>注6</sup>図版②参照】。一紙から五紙継ぎの未装の卷子本で全十四卷。一卷ずつ「令」「歳」「千」「香」「凍」「風」「故実」「元」「梅」「二」「面」「煙」「官職<sup>并</sup>類書」「父」と書物の分類のための漢字一字が冒頭に付されている。<sup>注7</sup>収載されるのは文書・典籍合わせてのべ六六五点である。

本稿では整理番号一一三のものを「菊亭文庫蔵書目録①」、整理番号一一一のものを「菊亭文庫蔵書目録②」と仮称し、論考中では煩瑣となるので「蔵書目録①」「蔵書目録②」と略称する。

両書とも基本的には「公事根元抄 一冊」などのように書名・員数を記すが、「板本」「無表紙」「端不足」など、書物の形態に関する注記、「上下」など巻次についての注記を付す場合もある。また、「野府記」治安二年夏 一ノ(冊)「【図版②】「凍」の部参照」のように、日記の場合はその所収年次を示すこともある。さらに「蔵書目録①」の日記の記載の中には「中右記／目録 三冊／寛治元 四季／二同／三同」と所収年次の内訳を詳細に明記し、「七拾七冊 重本一冊」と最後にその員数をまとめて示す事例もある。

前述したように、「蔵書目録①」「蔵書目録②」とともに奥書がなく成立年代は未詳であるが、「蔵書目録①」については、中に記される「安永三十九八」(安永三年(一七七四)九月十八日)という注記が目録中で確認できる最下限の年紀であることから、この目録は十八世紀後半、少なくとも安永三年以降に作成されたものと推定できる。「蔵書目録②」については、さらに下って「改革和四革命仗議并改元次第 一ノ(冊)」と文化元年(一八〇四)の記録の記載があるので、十九世紀初頭に作成されたものと推定できる。つまり、「蔵書目録①」は十八世紀後半の、「蔵書目録②」は十九世紀初頭の菊亭家の蔵書の様相を示すものと言える。また、両書とも書名や日記の所収年次に墨抹されているものが見えることから、目録が作成された後、さらに蔵書の整理・点検の際に使用された可能性がある。特に「蔵書目録②」には、合点など書物の点検の際に付されたとおぼしき痕跡が数多く見出せる。

また、「蔵書目録①」「一丁表」に見える「日本紀」以下五点の書物の記載の後に「已上一箱」とあること(【図版①】及び「翻刻本文」一丁表参照、十五丁表に「記録之箱」とあり「嘉」と漢字一字が掲げられ、書名が列記されていることから、その蔵書の実態が箱(函)ごとに書物を分類・収蔵したものであったことが明らかとなる。ことに

「嘉」以下の「記録之箱」については、表紙見返に書かれた『和漢朗詠集』の漢詩の文字一字一字を一つの箱（函）に付して分類していたことがうかがえる。

現在、京都大学附属図書館や専修大学図書館に蔵される「菊亭文庫」の書物の中に、漢字一字を書いた縦一・五糧、横〇・五糧ほどの付箋が表紙に貼られているものを数多く見出すことができる。これはつまり、「蔵書目録①」の分類を示すものである。例えば京都大学附属図書館架蔵の『八幡行幸次第』<sup>(注8)</sup>には「万」、『不被用年号』<sup>(注9)</sup>には「歳」、『雅言卿記』<sup>(注10)</sup>には「凍」、『中臣祓抄』<sup>(注11)</sup>には「東」、『柱史抄』<sup>(注12)</sup>には「度」、『萬一記』<sup>(注13)</sup>には「梅」、『平時信記』<sup>(注14)</sup>には「面」、『延久五年記』<sup>(注15)</sup>には「寒」、『不審条々』<sup>(注16)</sup>には「花」の付箋が貼られ、同様に専修大学図書館架蔵の『薫物相伝次第』<sup>(注17)</sup>には「央」、『諸社縁起発端』<sup>(注18)</sup>には「封」の付箋が貼られている（例として『図版③』に専修大学図書館蔵『薫物相伝次第』を挙げた）。上記の書物はすべて「蔵書目録①」に記載されており、その分類名も完全に一致する。江戸期の菊亭家における具体的な書物の分類・整理の様子をうかがわせるものとして注目されよう。<sup>(注20)</sup>

### 三

十九世紀初頭に作成された「蔵書目録②」が十八世紀後半に作成された「蔵書目録①」を受け継ぐものであることは、記載書名がほとんど一致することからも確認できる。その成立の前後を示す事例を挙げると、「蔵書目録①」の部に「同（改元部類記）十八公 三冊」（二十五丁表）とあるのが、「蔵書目録②」で同じく「歳」の部に「改元部類記 十八公」と見えるものの、その冊数が「二冊」となっていて一冊欠失していることが分かる。このことは「蔵書目録②」の中で「不足之分」として「同（改元部類記）十八公 一冊不足」と書かれているのである。ま

た同様に、「不足之分」として記載される「改元仗義散状 一冊」「年号文字引書拔書 一冊」「元禄十七年改元次第一ノ(冊)」は、すべて「蔵書目録①」には存在している。つまりこれらは、「蔵書目録①」の作成から「蔵書目録②」が作成される間に、文庫から流出した書物ということになる。

また逆に「蔵書目録①」には見えず、「蔵書目録②」にのみ見える書物もある。現在、そのうち『延宝度難陳』<sup>(注21)</sup>『玉英』<sup>(注22)</sup>『禁裏政典』などは京都大学附属図書館、『改元参陣公卿并奉奏号留』<sup>(注22)</sup>『神宴部類 七』などは専修大学図書館蔵の菊亭文庫中に認めることができる。「蔵書目録①」成立後、「蔵書目録②」作成までの間に菊亭家の蔵書に加えられた可能性が高い。このように、二種の目録の記載書物の比較からも、これだけの情報が得られるのである。

次に「蔵書目録①」と「蔵書目録②」における書物の分類であるが、「蔵書目録①」の「令」「歳」「千」「凍」「風」「梅」「面」の部は、「蔵書目録②」においても分類名・記載書名ともにほぼ一致することから、そのまま踏襲されていることが分かる。また、「蔵書目録②」で分類名が変わっているものでも、記載書名の比較から、全く別の新たな分類の項目が立てられたわけではないことが確認された(「蔵書目録①」「蔵書目録②」の分類の対応関係については表に掲げた)。分類名の変更は、「蔵書目録①」で「央」の分類であった香道関係の書物が「香」に、同様に「度」であった儀式作法関係の書物が「故実」に、「花」であった官位関係の書物が「官職<sup>并</sup>類書」になるなど、直接的に書物の内容を指す名称に変えられていることが分かる。また、「蔵書目録①」で『和漢朗詠集』の詩句を形成していた「央」が「香」に、「度」が「故実」に、「窓」が「元」に、「北」が「二」に、「寒」が「煙」に、「花」が「官職<sup>并</sup>類書」に、「下」が「父」に変えられていることから、「蔵書目録①」が成立してから「蔵書目録②」が作成されるまでの間に、文庫の書物の分類記号が『和漢朗詠集』の詩句に拠るものではなくなったことが分かる。また、「蔵書目録①」「飲」の部にあった「私要抄<sup>宣下部</sup> 一冊」が「蔵書目録②」では「令」の部に見えるなど、分類名をそのまま踏

以下、「蔵書目録①」の分類とその内容、「蔵書目録②」との対応関係を表示する。

<p>〔蔵書目録①〕</p>	<p>歴史書（二箱） 部類記（二箱） 有職故実・補任・通史・系譜 日記 〔嘉〕 楽目録・楽譜類・楽書 〔辰〕 日記・記録（年号勘文など） 〔令〕 消息・文書・書札礼 〔月〕 節会関係 〔歛〕 書札礼・宣旨・文書案 〔無〕 仏事・法会関係 〔極〕（書名記載なし） 〔萬〕 行幸・御幸次第など 〔歳〕 改元関係 〔千〕 日本紀関係</p>	<p>22 51 29 0 47 17 4 46 35 3 16 9 4 5</p>	<p>点数</p>
<p>〔蔵書目録②〕</p>	<p>〔令〕（歛） 〔歳〕 〔千〕</p>	<p>14 82<sup>※</sup> 68</p>	<p>点数</p>

\*1 ( )は混入している部を示す。以下同じ。

\*2 墨抹を除くと実質65点

〔秋〕 関東下向	1箱	
〔案〕 消息類	1箱	
〔末〕 伊勢神宮年中行事・儀式・下行	14	
〔央〕 香道関係	12	〔香〕
〔池〕 系譜・系図	29	
〔凍〕 歴史書・記録・有職故実など	41	〔凍〕〔千〕
〔束〕 神道関係	54	
〔頭〕 神宮消息類	1箱	
〔風〕 叙位・除目関係	51	〔風〕
〔度〕 儀式作法など	33	〔故実〕〔解〕〔帰〕
〔解〕 有職故実関係	18	
〔窓〕 改元関係	9	〔元〕〔面〕
〔梅〕 即位関係	33	〔梅〕
〔北〕 官職・補任関係	34	〔一〕〔帰〕
〔面〕 日記類	48	〔面〕
〔雪〕 樂書・樂譜など	65	
〔封〕 寺社縁起類	39	
〔寒〕 日記類	30	〔煙〕〔面〕
〔花〕 官位関係	30	〔官職并類書〕
〔下〕 地誌・年代記・官位・有職故実・書目など	48	〔父〕〔池〕〔封〕〔度〕〔花〕
〔忘〕 聞書類	1箱？	

44	27	40		48	41	85	33		43	72 <sub>3</sub> *	35	33
----	----	----	--	----	----	----	----	--	----	-------------------	----	----

※3 「不足分」を除くと実質66点



「帰」官職・宣旨・補任・家伝など  
 「因」(表紙見返に記されるのみ)  
 「美」(表紙見返に記されるのみ)  
 「景」(表紙見返に記されるのみ)  
 「樽」(表紙見返に記されるのみ)  
 「前」(表紙見返に記されるのみ)

31

計 911 点

計 665 点

※この分類は、便宜上、簡略に示したものである。内容をさらに精査し、さらなる細分類を行うことによって、どの程度の分類意識があつたか再検討する必要がある。『本朝書籍目録』の分類などと照らし合わせる必要もあろう。

「蔵書目録①」で三十七（実質三十二）あつた分類が、「蔵書目録②」では十四に減少し、掲載点数ものべ九二一点から六六五点に減じているが、「蔵書目録①」から「蔵書目録②」作成の間に蔵書が大幅に減少したとは考え難い。「蔵書目録②」は未装の卷子本という形態によって、散逸した巻があつたと考えるべきであらう。

また、書物の分類は、参照の便宜を考えた実用的なものであつたことがうかがえる。「蔵書目録①」を例にとると、「行類抄<sup>遼幸</sup> 一ノ（冊）」は「萬」の部（行幸・御幸次第）の中に記載され、「行類抄<sup>改元</sup> 一ノ（冊）」「行類抄<sup>臨時部</sup> 一ノ（冊）」は「歳」の部（改元関係）の中に記載されている。同一の書でも巻ごとに内容によって分けるなど、意識的な分類のさまを認めることができる。

特徴的なのは、「蔵書目録①」「蔵書目録②」とともに漢籍及び物語・和歌関係の書物は見えず、日記・文書などの記

録、特に有職故実関係のもので占められていることである。この事実は、「蔵書目録」に記載された書物が当時の菊亭家の蔵書の全容ではないことを示すものであろう。この二種の「蔵書目録」が、ある目的により、意識的に書物を選別して作成された可能性がある。また、「天正十八年日次記」晴季公 一冊(注23)、「書札礼」晴季公御筆 二ノ(巻)(注24)、「関白秀吉公之時」晴季公筆 一卷(注25)、「隨身之事」景光院殿筆 一卷(注26)のように、文芸・学問に秀で、和歌をはじめ有職故実関係などの著作を数多く残した菊亭家の人物、今出川晴季(一五三九―一六一七)の名を目録中に見出すこともできる。晴季の著作が菊亭家内で代々どのように受け継がれ、取り扱われていたのか探る上でも興味深い。さらに特徴的なのは、「蔵書目録①」「雪」の部に、総数六十五点に及ぶ樂書が一括して記載されていることである。(注27)〔図版①〕四十二丁裏が「雪」の部の一部である。なお、「蔵書目録②」に樂書類が一点も見えないことは、樂書を記した巻が欠失したということになろう。「蔵書目録②」に散逸した巻があったことの証左となる。こうした蔵書の傾向は、菊亭家という琵琶を「家業」とする「家」意識の表れと見ることができる。

#### 四

本稿では、これら二種の「蔵書目録」の概要を述べるにとどまり、本目録がいかなる目的で作成されたのか、また、菊亭家における蔵書の基礎がいつ頃築かれたのかなど、重要な問題について言及することができなかった。また、菊亭家の蔵書と近世禁裏文庫や紅葉山文庫との関係、さらに樂書に関して言えば伏見宮家などとの関係、その他、東京国立博物館に架蔵される今出川旧蔵書についてなど、この「蔵書目録」に関連して解明すべき問題は多い。それらは稿を改めて論じることとし、以下「菊亭文庫蔵書目録①」「菊亭文庫蔵書目録②」を紹介することとしたい。

（なお、「蔵書目録」と京都大学附属図書館・専修大学図書館架蔵本との対照表についても掲載予定である）。

（注1）昨今研究の進みつつある「社会の重要な構成要素」である「家」としての意識、その家の「家業」というものに対する意識を探る上でも、蔵書の傾向を明らかにすることには重要な意味があろう。この方面の研究としては、高橋秀樹氏「家と芸能——琵琶の家——西園寺家をめぐって——」（五味文彦氏編『芸能の中世』二〇〇〇年三月・吉川弘文館）がある。さらに氏が指摘する「西園寺実兼置文写」の中の、西園寺家の「北山文庫」を菊亭家（今出川家）の祖兼季らに「閲覧・書写」を認めたという事実に着目すると、西園寺家の蔵書と「菊亭文庫」の関係についても考察する必要があるう。

（注2）専修大学図書館発行・一九九五年七月。

（注3）専修大学図書館ホームページによる。

（注4）現在の菊亭文庫の書物と対照すると、目録はおおむね典籍の外題を記載していることが分かる。

（注5）【図版①】には表紙見返及び一丁表、「雪」の部（四十二丁裏）、「封」の部（四十二丁表）、「寒」の部（四十三丁裏・四十四丁表）の一部を掲げた。「寒」の部（四十三丁裏）には『李部王記』が見える。

（注6）【図版②】には「凍」の巻（部）、「官職<sub>并</sub>類書」の巻（部）を挙げた（紙継ぎを「を以て示した」。「官職<sub>并</sub>類書」の巻（部）に『禁裏御記目録』（二冊）が見える（「蔵書目録①」「花」の部にも同書が見える）。

（注7）いずれも高さ十二糎。「令」紙数四紙、幅二六〇。「歳」紙数四紙、幅一二・二。「千」紙数一紙、幅二一。「香」紙数三紙、幅四九・五。「凍」紙数二紙、幅五〇・二（小虫損あり）。「風」紙数四紙、幅二一・七。

「故実」紙数三紙、幅五七・七。「元」紙数三紙、幅六〇・三。「梅」紙数五紙、幅一三六。「一」紙数二紙、幅

五三。「面」紙数三紙、幅七二。「煙」紙数二紙、幅六九（小虫損あり）。「官職<sup>并</sup>類書」紙数二紙、幅四五。

「父」紙数三紙、幅五九・五（小虫損あり）。全巻の端裏書に朱書で「写済」とあり。

（注8）請求記号、菊一ハ・二一。

（注9）請求記号、菊一モ・四。この『不被用年号』は「蔵書目録①」「歳」の部に「二冊」と記載されており、現在、京都大学附属図書館と専修大学図書館（整理番号九八〇）に一冊ずつ架蔵されている（そのいずれにも「歳」の付箋がある）。

（注10）請求記号、菊一マ・一。

（注11）請求記号、菊一ナ・六。

（注12）請求記号、菊一チ・七。

（注13）請求記号、菊一マ・五。

（注14）請求記号、菊一タ・二〇。

（注15）請求記号、菊一エ・一三。

（注16）請求記号、菊一フ・六、菊一フ・七。この『不審条々』は「蔵書目録①」「花」の部に「各全二冊」と記載されており、現在京都大学附属図書館に完本が二冊蔵されている（そのいずれにも「花」の付箋がある）。

（注17）整理番号一六七。この『薰物相伝次第』は「蔵書目録①」「央」の部に「二冊」と記載されており、現在、京都大学附属図書館と専修大学図書館に一冊ずつ架蔵されている（そのいずれにも「央」の付箋がある）。

（注18）整理番号一八七八。本書については拙稿で論じたことがある（「専修大学図書館蔵『諸社縁起発端』について」〔『中世文学』第四十八号・二〇〇三年六月〕。「専修大学図書館蔵『諸社縁起発端』（菊亭本『諸社功能』）

解説並びに翻刻」（『専修国文』第七十三号・二〇〇三年九月）。

（注19）確認できたもののうち、そのいくつかを例示した。「蔵書目録①」中に記載があつて現在京都大学附属図書館や専修大学図書館に所蔵される書物のすべてにわたつては未確認であるが、ほとんどのものにこの付箋があると考えられる（付箋添付の痕跡のみを留めるものもある。例外的に直書のものも認められた）。

（注20）この付箋は、「蔵書目録①」に記載があり、現在京都大学附属図書館や専修大学図書館には架蔵されていない菊亭家旧蔵書を探索する手がかりともなろう。

（注21）請求記号、菊―エ・一六、キ・一三、キ・三五。

（注22）整理番号九九二、一一三五。

（注23）「蔵書目録①」十七丁表。

（注24）「蔵書目録①」十八丁表。「蔵書目録②」「令」の巻。

（注25）「蔵書目録①」三十二丁裏。「蔵書目録②」「凍」の巻。

（注26）「蔵書目録①」三十六丁裏。「蔵書目録②」「故実」の巻。

（注27）その中に見える「郢曲最秘 一ノ（巻）」「催馬楽譜琵琶 安名尊 一ノ（巻）」「催馬楽譜笛 安名尊 一ノ（巻）」などは、現在でも京都大学附属図書館の「菊亭文庫」中に架蔵されている（『郢曲最秘』菊―巻・六、『催馬楽譜安名尊』（二巻）菊―巻・三七）。

（注28）「蔵書目録①」は、当時の菊亭家当主今出川実種（二七五四―一八〇二）が自ら作成し、「蔵書目録②」は実種の死後作成されたものと考えている。

（注29）近世禁裏文庫についての研究は、現在田島公氏を中心として精力的に進められている（田島公氏「禁裏文庫

の変遷と東山御文庫の蔵書―古代・中世の古典籍・古記録研究のために―（『日本社会の史的構造』 古代・中世、一九九七年五月・思文閣出版）。『皇室の至宝 東山御文庫御物』一―五（一九九九年―二〇〇〇年、毎日新聞社）。『禁裏・公家文庫研究』第一輯（二〇〇三年二月・思文閣出版）など。本稿も氏の研究に導かれること大であった。

（注30）現在伏見宮家の旧蔵書は宮内庁書陵部に架蔵されている。伏見宮家は、琵琶の伝習を帝王学の一つとして重んじた後深草天皇から数えて五代目の栄仁親王を祖とする家であり、大量の樂書が代々伝えられた。その具體相は『圖書寮叢刊 伏見宮旧蔵樂書集成』一―三（一九八九年・一九九五年・一九九八年、明治書院）に相馬万里子氏によって紹介されている通りである。伏見宮本の中に菊亭本を親本として書写されたものがあることは、同書所収の書物の奥書などから明らかになっている。こうした情報をもとに、樂に関わる家同士の交流についてさらに検討を進めていく予定である。

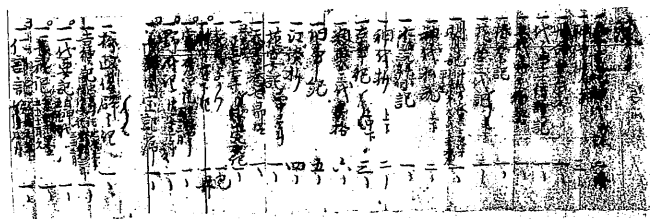
（付記）本稿を成すにあたり、京都大学附属図書館、専修大学図書館には貴重な資料の閲覧など様々に便宜をはかっていただいた。心より感謝申し上げる。また、専修大学図書館には翻刻本文および写真の掲載についてご許可いただいた。ここに深謝の意を表したい（【図版】はマイクロフィルムから複写したものをさらに複写したため不鮮明となり、原本にはない汚れ等が多くうつりこんでいる。ご了承いただきたい）。なお、本稿は平成十六年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）による研究成果の一部である。



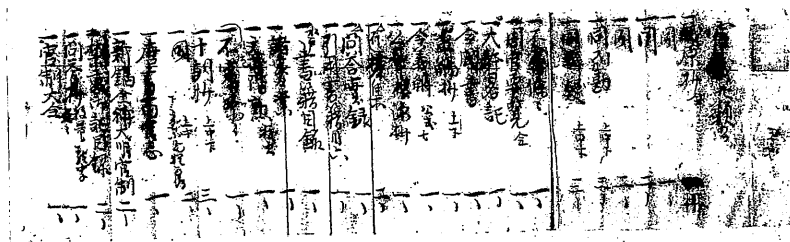
【圖版②】

「菊亭文庫藏書目錄②」

(『蔵書目録』)整理番号一一一)



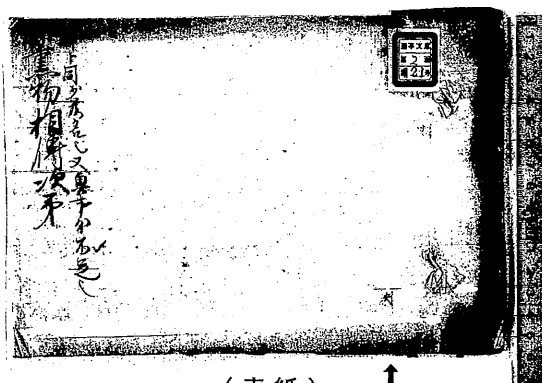
紙



紙

【圖版③】

『薰物相伝次第』（整理番号一六七）



( 表 紙 )





専修大学図書館蔵「菊亭文庫蔵書目録①」翻刻（一）

ここに翻刻するのは、専修大学図書館「菊亭文庫」に収められている「菊亭文庫蔵書目録①」（『蔵書目録』（整理番号一一三（第八函〇二二））である。紙数の都合上、全文の掲載には至らなかったため、続きは次号以降に掲載することとした。

なお、翻刻にあたっては原本の忠実な再現に努めたが、通読の便を考慮し、次の要領に従った。

凡例

- 一 翻刻には原則として通行の字体を用いた。
- 一 改行は原本の行取りに従った。
- 一 改丁は「」を以て示し、丁数と表（オ）・裏（ウ）の別を示した。
- 一 明らかな誤字・脱字など注記事項は（ ）に示した。
- 一 墨抹の部分も下の文字が判読できた場合には、なるべく原本を再現するように翻刻した。
- 一 判読不能の文字は□を以て示した。

嘉辰令月歛無極  
萬歲千秋樂未央  
池凍東頭風度解  
窓梅北面雪封寒  
花下忘歸因美景  
樽前

日本紀	自神代至持統	拾五冊	板本 寫入
統日本紀	起文武天皇十三年八月 尽延暦十年十二月	廿冊	
統日本後紀	起天長十年二月 尽嘉祥三年三月	廿冊	
文德實錄	起嘉祥三年三月 尽天安二年八月	五冊	
三代實錄	起天安二年八月 尽仁和三二年八月	廿冊	
已上一箱			
立坊部類記		二冊	書本 寫入
東宮元服部類記		二冊	
立后部類記		五冊	
軒廊御下部類記		三冊	

「表紙

「表紙見返

已上一箱			
統類聚抄		十冊	書本 寫入
貴女抄		一冊	
已上十箱			
禁仙宮下女官名事			
二判問答抄			
諸記抄物拔書		一策	
公卿補任	自神武至宝永四	二十八冊	
内三冊仮帳也	宝永三年欠		
重本五冊書之			
一代要記	自允恭至花園	十冊	寫入
諸家伝		廿五冊	同
大系図		三十冊	同 板本
(以下余白)			

「 2才

「 1ウ

「 1才

中右記

目録

寛治元 四季  
二 同  
三 同  
同 四年  
五年  
同 六年  
同 年  
同 七年  
同 八年  
同 年  
同 年

春 冬 春  
四五六  
壬三ヨリ七月  
自八月至十月

三冊

┌	┌	┌
3	3	2
ウ	オ	ウ

同 年	同 年	同 年	同 年	同 二 年	同 年	同 年	同 年	天 仁 元 年	同 年	同 年	同 年	同 二 年	嘉 承 元 年	康 和 四 年	同 三 年	嘉 保 二 年	同 年
--------	--------	--------	--------	-------------	--------	--------	--------	------------------	--------	--------	--------	-------------	------------------	------------------	-------------	------------------	--------

自十一月十二月  
夏  
春  
正三月  
冬  
春  
夏  
秋冬  
冬  
諒閣中  
春  
夏  
秋  
冬  
正二  
自三〇六<sub>至</sub>  
夏  
自七至十  
十一十二月

4才

同三年

同年

永久二年

同年

同年

同年

永久六年

4ウ

三  
四  
五  
六  
月

秋

十二月

春夏秋冬  
四冊

同  
四冊

正月

三四五六月

秋

冬

同四年

同

一三三  
月

夏

七壬七凶事方

自八至十

十一

春

四月

自五至八月

九十月

十二月

春夏  
二冊

自八至十二月 一冊

5才

從正至四月

夏秋

春夏秋冬  
四冊

春夏秋冬  
四冊

春

四季  
一冊

正月

同七年

春 公教卿記也

七拾七冊 重本一冊

(以下余白)

九曆 九条左大臣師輔公記

一冊

天曆元年

有正七

二年 四季

三年 四季

四年 四季

天德元年

四十八月欠

二年 春夏

三年 四季

四年 春夏

御堂関白道長公記

五冊

寛弘二年

三年 四季

四年 四季

四冊

五年 四季

長和二年

春夏

一冊

師実公家記

京極関白

一冊

寛治二年

三月十二月

寛治二年十一月九日記為房卿記トアリ  
四年十一月廿日記失記トアリ 全

後一条関白師通公記

六冊

応徳三年

秋冬

寛治二年

同

五年

春

「5ウ

七年

春

同年

夏

宇槐雜抄 額長公記

一冊

保延二年

十一月三月八月正月七月十二月  
五年 七月

仁平二年

四月

全

天慶八年

八月

法勝寺関白忠通公記

一冊 不見

殿記 後京極摂政良経公記

二冊

建仁四年

十一月十二月

天仁元年

十月四月  
四月八月

保安四年

十月四月六月  
四月八月十一月

天永三年

三月四月十一月

康和四年

四月十一月  
九月

嘉承二年

十一月

天治元年

六月

嘉承二年

九月十一月二月

長治二年

二

諸例有也 年号 全混雜  
不可考

二冊

猪隈関白家実公記

四冊

正治三年

春

「6才

建仁二年	秋	
承元二年	春	
岡屋関白記 <small>兼経公</small>	三冊	
建長元年 宝治三年	春	
建長二年	夏	
三年	秋	
深心院関白記 <small>基平公記</small>	二冊	
建長八年	四季	
文永二年	春	
後深心院関白記 <small>道嗣公記</small>	十一冊	
応安二年	正三三四月	
同年	秋冬	
四年	春夏	
五年	春夏	
同年	秋冬	
六年	春夏	
同年	秋冬	

「6ウ

七年	春夏	
八年	春夏秋 <small>七八月欠</small>	
同年	秋冬 <small>七八月有九月ナシ</small>	
永和五年	秋冬	
御堂関白記拔書	一冊	
寛弘 寛治 <small>（ノ誤カ）</small> 等也		
已上一箱	三十八冊	
（以下余白）		
明月記		
要目		
治承四年五年	自三月至五月二日	
建久三年	四月	
七年	五月一日より至六月廿九日	
九年	正二月	
正治元年 十年	春夏	
正治元年 十二年	十二月	

「7ウ



四年

春下ニアリ

嘉禄元年  
文暦二年

春

四月

冬

冬

夏

安貞三年寛喜元年

三四月

寛喜元年

五六月

秋

冬

寛喜二年

正壬正月

從二至四

從五至九

冬

三年

春

秋

貞永二年天福元年

春

四五月

六七八月

九十一十二月

天福二年文祥元年

秋

補遺

正治二年十月 建仁二年二月 貞永二年四月 全

釈奠次第并図

臨時祭試楽

叙位入眼

歌道事

別記

嘉禄三年 七八九月 一冊

重本 九冊

已上七十一冊 重本九冊

薩戒記

目錄 自應永廿五年至永享二年

應永廿五年 正三四五六月

「9才

「9ウ



同年	正三四五六月	月不知自三日至六日
	賀茂祭記五月二日	持院御八講之記
廿六年	正月	
廿八年	正月	
廿六年	八	
廿一年	秋七六月	
卅二年	九月九日	
同年	正月上下	
卅二年	正月拔書	
正月下		
二三月		
四月		
四月下		
五月		
六至六月		
七月		
八月		
廿三年	正月下	叙位除目 <small>六日</small> 種々公事
冬		
二月		
三月上		
三月下	除目入眼記	
四五月		
六月		
七月		
八九月		
十月		
十一月		
十二月		
春		
正長元年		
二年		
永享十年		

「10オ

「10ウ

正長二年	春	正長二年	夏秋
年月不知	自五 至廿九日	凶事記	
應永卅一年	九月九日平座記		
正長元年	同上		
永享十年	二月		
十一年	正長正		
應永卅年	冬		
永享二年	二月		
同年	二月		
九年	八月		
二年	四十一十二月		
	十二月		
四年	十二月九日	左大臣拝賀記室町殿	
五年	正月		
	二三月		
	八九月		
	四五六月		
	十一月		

宣下消息	抄出																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																			</
------	----	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	--	----

三年		春	夏	冬	正	一 二 三 月	夏	秋冬	春 正 欠	夏秋	冬	四季	春夏	秋冬	冬	春夏	秋冬	春	夏	秋	冬	春夏秋	冬
二年		四五月	六月	秋	冬	春	夏	秋	十月	十一 十二 月	春	四年	五年	建久元年	二年	二	三	四	五	六	七	八	九
一年		四五月	六月	秋	冬	春	夏	秋	十月	十一 十二 月	春	四年	五年	建久元年	二年	二	三	四	五	六	七	八	九

┌  
12  
ウ

┌  
13  
才

重本 一冊	朝親行幸記 建久八年四月 建仁元年正月 中記	今上第一皇女御五十日儀 建久六年十月	伊勢勅使別記 建久六年二月	高倉院第二親王御書始記 建久元年十二月	別記 全 一冊	二年 四季 四五八月欠	正治元年 正月	九年 正六月	八年 正四月	七年 四季 六七八九上 月欠	六年 四季 五六七八上 月欠	五年 正三三四七八九月	四年 四季 冬六月欠	三年 四季 七上二月欠	十一月 十二 十二
----------	---------------------------------	-----------------------	------------------	------------------------	---------------	-------------------	------------	-----------	-----------	-------------------------	-------------------------	----------------	------------------	-------------------	-----------------

13ウ

\*以下、次号以降に掲載する。

目録 上下  
已上七十七冊  
(以下余白)

二冊

14ウ

14オ